

2025年度 入学試験問題

2月2日 第2回

国語（45分）

注意

1. はじめのチャイムがなるまで問題用紙には手をふれないでください。
2. 問題は2から14ページまでです。
3. 解答用紙には氏名でなく、受験番号を書いてください。
4. 机の上にあるQRコードのシール（どれでも良い）を解答用紙右上の「ここにシールをはってください」のわくの中にはってください。
5. 解答はすべて解答用紙に書いてください。
6. おわりのチャイムがなりはじめたら、書くのをやめて、えんぴつをおいてください。
7. 句読点・記号も字数に数えます。
8. 本文は出題の都合上、一部変更しています。

三輪田学園中学校

一——1〜10のカタカナの部分で漢字に直しなさい。
また、——11〜15の読み方をひらがなで答えなさい。
つづけ字ではなく、一点一画をていねいに書くこと。

- 1 食糧をユニユウする。
- 2 チンタイマンションに住む。
- 3 時代のチョウリュウに乗る。
- 4 アヤマった情報が伝わる。
- 5 天高く馬コゆる秋。
- 6 ジビカに行つて薬をもらう。
- 7 その裁判の判決はゴウケンだ。
- 8 キリツを守つて生活する。
- 9 火星の無人タンサ機。
- 10 人々のザイサンを守る。
- 11 短冊に願いごとを書く。
- 12 糸を垂らす。
- 13 皮革製品を購入する。
- 14 新しいクラスで腹心の友を作りたい。
- 15 さいふの小銭を数える。

二次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

マコは、小学四年生の時から、オッサン（よしもむとふたてし吉本太）の自宅で
行われている美術教室に、友だちのユウと二人だけで通っている。
次の場面は、小学五年生になったマコたちが、新年度最初の給食
委員会に集まっているところである。

その日は初めての委員会活動だったので、みんな少し緊張して
いるようだった。

担当の先生は小野先生という若い女の先生だった。初顔合わせ
だったのでそれぞれ自己紹介をした。

そのあと先生からこれからの活動内容についての話があった。
エプロンチェックや残飯調べ、配膳の手伝いなどが主な活動だっ
た。その中でマコがおもしろそうだと思ったのは、低学年に栄養
について紙芝居をしに行くというものだけだ。

先生が黒板に書いたことをみんなお行儀良くノートに書き写し
ていた。マコも、同じように給食委員会のために下ろした新しい
ノートに、できるだけていねいに書く。後ろをふり返つてチラリ
と見ると、ユウと目があったのであわてて前を向く。

「ノートに書き写したら、四人ずつグループになって他に給食委
員会でどんなことができるか話し合ひましょう」

小野先生の指示で、三つのグループに分かれて話し合ひを始め
ようと机の移動をする。ユウとは別のグループだった。

マコが同じグループになった西岡修の近くへ机と椅子を運ぼう
としたその時だった。

「先生、俺（おれ）いつと一緒のグループはいやです」

西岡修はマコを指さして大きな声を出した。みんないつせいに
マコを見た。六年生の西岡修とは話をしたことはないが、去年の
運動会で応援団をしていて、まわりの女子がイケメンがいると、
わざわざそばまで見に行つてキヤーキヤー騒いでいたので、なん
となく顔は覚えていた。

小野先生がなにか言おうとしたけれど、その前に西岡修はこう
続けた。

「俺、おまえのこと知ってるぞ。毎週日曜日になると屋根に変な
でっかい足がのった家に通ってるだろ。あいつ、成田夕夏も一緒
に歩いてるの見たぞ！ おまえはともかく成田夕夏はもつとまと
もなヤツかと思つてたけど、おまえらやつぱら変わりもんだな」

マコがユウを見ると、ユウはすでにまっすぐ立って西岡修をす

「ごい形相でにらみつけていた。」

ユウは、こういう時言いたいことを言葉にせずじつと黙っている子どもだ。決して涙も見せない。

1 修はその目線には気づかないのか、トーンをあげて話し続けた。「俺のお母さんが言ってたけど、あそこにいるおじさんは頭がおいしいから絶対近づくなんて。おまえの親もよくもあんなところに平気で子どもを行かせて、どうかしてるってさ。あのおじさんの息子は俺の兄ちゃんと同じ高校出身だけど、暴走族に入っていて何度も警察に捕まってたって今でも有名らしいぞ。親が親だから子どもも子どもなんだって。しかもあのおじさん、ボロ小屋に住んでいっつも汚い服着て変な目つきして土手を歩いてるだろ。おまえらみたいな変人ジジイの仲間と机くつつけるの俺、絶対いやだから！」

マコの心臓は今まで聞いたことのないくらい大きな音で鳴り出した。全身のすべての血液が顔のあたりに一瞬で集まってくるのが、自分でもわかった。

2 それから先のこととはあまり覚えていない。

自分よりもずいぶん体の大きな上級生に机を乗り越えて飛びかかってタックルし、そのまま馬乗りになって修が手に持っていたアルミ製のペンケースを窓から投げ捨てたというのだ。

マコが気がついた時、西岡修はわんわん泣いていて、数人の六年生が彼の近くに集まってなぐさめていた。修のおでこには引っかけ傷ができて、少し血がにじんでいる。他のまわりの子どもたちは、いつせいになんとも言えない目でマコを見ている。

ユウはさつき立っていた場所で、マコが見た時と同じ格好のまま、
3 下唇を噛みしめて一点をにらみつけていた。

マコは声をあげて泣きたい気持ちだったが、みんなの前で絶対に泣きたくなかった。けれど、ちよつとでも声を出したら涙があふれてしまいそうで、何も言わずに教室を走って飛び出した。

「海老原麻子さん！ 麻子さん！ 教室に戻りなさい！」
かん高い小野先生の声が廊下に響いた。

ママが学校に着いた時は、担任の清水先生と小野先生、西岡修とその母親が五年一組の教室にいた。マコもその輪の中にポツリと座っている。

とうに下校時間を過ぎていたので、他の子どもたちは誰もいなかった。マコの隣に用意された椅子にママが座った。

ママは修のおでこのばんそうこうに目をやった後、マコをじつと見つめた。

それから姿勢を正すと「いったい何があったのでしょうか」と静かな口調でたずねた。

「聞きたいのはこっちのほうよ！ 修のおでこの傷！ おたくの子がやったんですってね。しかもペンケースをうばって窓から投げたなんて！ 変わってるお子さんだと聞いてはいたけど、女の子のくせに暴力振るうなんて。いったいお家でどういうしつけをしてるのかしら!? 先生もいたところで起こったっていうじゃないですか。だから若い先生は困るのよ。ちゃんと見てもらわないと！」

修のお母さんが声を荒らげて机を「A」たたきながらまくしたてていると、隣にいた修がおでこを押さえながらまたシクシク泣きべそをかきました。もう片方の手で、へこんで形の変わってしまっただミッキーマウスのペンケースをひざの上で握りしめている。

「痛かったよね、怖かったね、もうお母さん来たから大丈夫だからね」

息子の頭をなでながら、修の母親はママをにらみつけた。

ママは一回呼吸を大きくした。

「そうでしたか。うちの娘が大切な息子さんにケガをさせてしま

い本当に申し訳ありませんでした。今後絶対にないように家で厳しく言つて聞かせます。ペンケースも弁償させてください」

それから深々と頭を下げた。

マコは西岡くんを引っかいたのも、ペンケースを窓から校庭に投げたのも私だから、にらむのもどなるのもママじゃなくて私にしてほしい、それに、西岡修が先に私を仲間はずれにして傷つけたんだ。そう思ったとたん、横から伸びてきたママの手に頭を後ろからグイッと押されて、マコも頭を下げる格好になった。

「マコ、修くんになんて言うの?!」

ママの厳しい口調よりも、頭を押すママの手の力が思ったよりも強いことに、⁴ マコは少なからずショックを受けた。

「西岡くん、ごめんなさい」

こんなにくやしくて、私だつて言いたいことがあふれるぐらいあるのに、マコはなんとかこの言葉を選んでそれだけを口にした。

西岡修はまだ【 B 】しながら赤ちゃんみたいに、うん、とうなずいた。

⁵ 修の母親はほんの少し口角をあげて首を伸ばして、ママを上から見下ろした。

「二度と、このようなことがないようにお願いしますね。それから、よそのおたくの教育方針に口出すつもりはないけど、土手浴の美術教室の吉本さんって方、近所の有名な要注意人物だつてことはご存じですよ。朝から酒臭いにおいさせて【 C 】したり、河原で女子高生をじつと見つめていたりするってうわさを知らないの? あんなどころに通わせるなんておやめになったほうがいいんじゃないかしら。芸術家だつていうけれど、意味不明な置物ばかり庭に置いて、藝大出だつていうのも本当なんだかどうか。おたくのお嬢さんじょうもこうしてすでに悪い影響を受けてようです。ねえ」

⁶ ママは長いまばたきを一回した。それから「はい。ご心配く

ださつてありがとうございます」とだけ答えると、⁷ もう一度深呼吸をした。

修の母親は今度は体を清水先生と小野先生に向けると、また机をたたき始めた。

「で、学校としては、どうしてくれるんですか?! こんな暴力を平気で許しているようなら、今後の対応を考えなくてはいけないと、主人とも話してきましたから」

「お母様のお気持ちはごもっともです。管理職にも報告して、若い教員の指導をしっかりといたしますので、今回は本当に申し訳ありませんでした」

清水先生も頭を下げた。

小野先生はずつとうつむいている。まだ教員になって二年しか経つていないし、おとなしく、^a 華奢な体で声も小さいからか、男子にからかわれたりしている姿を廊下で見かけたこともある。

「で? 現場にいた当のご本人の小野先生からは何も謝罪がないようですけど、ご自分の責任、あなた、わかつてんの?」

さらに語気を強めて、修の母親は小野先生に詰め寄つた。

マコはやつぱり、これは私がやったことで小野先生のせいでもママのせいでもない、ましてやオッサンのせいでもない。⁸ どうしても今ここでそのことを言わなければならぬ、と覚悟を決めて声に出そうとした。

その時、小野先生が顔をあげた。震えているがいつもより大きな声だった。

「私がしっかりしていないせい、今回のことを止めることができず本当に申し訳ありませんでした。もつときちんと指導していたらこんなことにはならなかつたと思います。麻子さんが修くんを引っかいたことも、ペンケースを外に投げたことも絶対にあってはならないことです。麻子さんもこうして厳しく注意を受けて

反省したと思います。でも麻子さんがどうしてそんなことをしてしまったのか、ちゃんと麻子さんの話も聞いてあげるべきだと思います。だって」

すると今度は小野先生の話の途中^{とちゆうちゆう}で、その言葉にかぶせるように 9 清水先生があわてて話し出した。

「とにかく本当に申し訳ありませんでした。その場にいた子どもたちにもヒアリングをして今後このようなことがないように、しっかりホームルームで話し合いをさせますし、修くんの担任はもちろん、管理職にも必ずこの件は伝えます。小野先生も着任して三年目、若さゆえ右も左もわからない状^{じようもよう}況^{きやう}ですから、どうか今日はお許しください」

それを横で聞いていた小野先生も一緒に頭を下げた。

それから小野先生は、ななめ向かいに座っている修に目をやり、机の上に置かれた修の手に自分の手をそっと重ねた。

「修くん、どうして麻子さんが修くんを引っかいたか、理由、わかるよね？」

小さな声でやさしくたずねた。

修は何も答えずうつむいていた。

話し合いが終わると、もうすでに小学校の正面玄関^{げんかん}は閉まっていた。職員室の真向かいにある職員専用の出口をあけて、ママとマコは子どもたちがふだんは使わない黒い鉄の門を抜けた。11 学校から家までの道はいつもと違う景色に見えた。マコは涙が止まらなかった。

オッサンを変人ジジイだと言われたこと。パパやママの悪口を言われたこと。みんなの前で指をさされて仲間はずれにされたこと。顔がすごく熱くなって自分が自分じゃないみたいになった。ユウを教室に一人残して自分だけ逃げ出した。ママが自分のしたこと^{こと}のせいであんなに深く頭を何度も下げている姿。いつもと違

う小野先生の声。西岡修のおでこにじんだ血の赤さ。マコの頭の中をそれらが【D】と順番に回る。

マコはもともと b ひょうきんで明るい性格だ。周囲からも無邪気な子どもに見える。でも、マコは学校にいる時、いつもなんとなく、疎外感^{そがいかん}のような、違和感^{いわかん}のような、他の子と違って、ひとりだけみんなから冷たい目で見られているのをほんの少しだけおぼろげに感じていた。でもそんなことは気のせいだろうと思うようにしていた。それが今日、西岡修に言われた一言で、不安に思っていたことが、マコの中ではつきりと現実になった。私はみんなから疎外されている。それは私が変な子だからなんだ。でも他の子と比べて何が違って、どこが変なのか、いくら考えてもわからなかった。自分の思う「普通^{ふつう}」と他の人の思う「普通」が異なることが悲しい、と思った。

「私、仲間はずれにされたんだよ。オッサンのことも変人ジジイだってバカにされたんだもん。どうしてあやまらなければならなかったの？ なんて、ママまであやまつたりするの？」

マコは目に涙をいっばいたためて、しゃくりあげながらママの横顔を見上げた。

ママは歩みを止めると、しゃがんでマコの肩^{かた}に手をかけた。

「あのね。マコ。理不尽^{りふじん}だと思うことがあった時、暴力^{ぼりき}ではなくて別の方法で相手に向き合ってほしいの。それから、人はあやまりたくなくても、たとえどんな理由があったとしても自分がやってしまったことに対して向き合ってちゃんとあやまらなくてはいけない時もあるのよ」

ママはマコの汗ばんだおでこにはりついた前髪^{まえがみ}をかきあげながら話を続けた。ママはマコに大切な話をする時にたいいそうする。だからマコも一言も逃さ^{のが}ないように聞く。

「私が西岡くん^{せいおかくん}にケガをさせちゃったから、それは悪いことだと思^{おも}う」

「そうね。どんな理由があっても暴力で相手を傷つけることはしないでしょう」とママは思う」

「じゃあ、そうではない別の方法って、どうすればいいの？」

ママは少し考えてこう答えた。

「それは言葉かもしれないし、マコの大好きなお絵描き^{えか}かもしれない。そう、マコにはお絵描きがあるじゃない！ マコがどうしても悲しくていやな気持ちになったのか、ちゃんと西岡くんやみんなに暴力以外の方法で伝えることができたなら、きっと今、マコもこんなに傷ついていないかもしれない」

「そうかもしれないけれど、でも、私、指をさされて向こうへ行けって言われた時、とてもつらくて悲しくて、顔が熱くなって体が勝手に動いちゃったの。教室にいるお友だちがみんな怖い人に見えたの。もうこんな怖い思いは二度としたくないよ」

この気持ちを、言葉やお絵描きで説明したりするなんてできないにない、とマコは思う。できそうにないけど、そうできたらいいな、とも思う。西岡くんを引っかけて傷つけてもマコの気持ちは晴れることはなかったし、何も解決することはなかった。それどころか西岡くんのおでこにじむ赤い血を見た時、疎外感^{うわぬ}を上塗りするように、さらにマコの心は傷ついたのだ。

ママはマコのその気持ちを察したようにやさしく笑って、マコの体を両手で引き寄せた。

「マコは吉本先生の彫刻を見て楽しくてうれしい気持ちになるって言ってたでしょう？ それに、先生に初めて出会った時、怖そうだし変な人って思ったけど、作品を見たらいっぺんに大好きになったんでしょう？ 西岡くんにもそのすてきさを教えてあげなくっちゃ。きっと西岡くんは知らないからそんなふうに言うのかもよ」

マコは西岡修や学校みんなが吉本太美術教室にやってきて、オッサンの彫刻や絵を見て目をまんまるくする姿を想像した。私

の好きなものをみんなも好きになったら、どんなにうれしいだろう。もしかしたら西岡くんとも仲良くできるのかな。

「マコがきれいだな、好きだな、と思うものを見つけたらみんなにも教えてあげようよ。もしも一所懸命^{いっしょけんめい}に伝えてみて、どうしてもわかってもらえなかったとしても、それでも人を傷つけてはいけません。伝えること、表現することをあきらめないでほしいの。マコはそれができる子だと思うから」

ママはマコの目の奥^{おく}をじっと見つめて、マコの手を握る。

「それからマコは変な子じゃない。ユニークって言葉知ってる？ 『唯一無二^{ゆいむに}の特別な存在』って意味なのよ。13 マコは変な子じゃなくてユニークな子だとママは思うよ」

「そうかな、私はユニークな子なのかな」

「そうよ。マコはユニークな子。マコにしかないユニークさを大事にしないとね」

「わかった。私、何があってもボウリヨクはしない。ママも悲しむし、私も悲しいから。あとは、言葉でとか、お絵描きでとか、うーん、どうしていいかわからないけど。でも私、仲間はずれにされたり、いやな気持ちになった時、それをちゃんと伝えたいと思っただ」

マコはうなずいた。全部を理解できたわけではないし、納得^{なつとく}できたわけでもない。けれどヒョウゲンをあきらめない、と思っただ。

14 ミドリ公園の角を曲がる頃^{ころ}、口をぎゅっと閉じて、目をつぶって、それからマコは泣きやんだ。

《中略》

美術教室の日がたまたま父の日にあたり、ママがマーマレードケーキを焼いてくれた。マコはケーキを持って美術教室に向かう。

「いつてきまーす！」

マコははりきった様子で出かけたものの、本当は心の中は

もやがかかったように不安な気持ちになっていた。オッサンと一緒にケーキを食べるのも父の日パーティをするのも、とても楽しみだ。でもケーキを持ってオッサンの家に行くところを学校の誰かに見られたら、きつとまた陰口かげぐちを言われるに違いないのだ。

少しユウウツな気持ちになりながらユウの家まで行くと、すでに通りに出てユウがマコを待っていた。

「おはよう。ユウちゃん。今日は父の日だからって、ママがマーレードケーキを作ってくれたよ。だから土手を通らず遠回りして木村八百屋きむらやおやの道から美術教室に行くよ」

「え、なんで？ なんでケーキがあると遠回りなの？ ずいぶん時間かかっちゃうよ」

「だって、こんなケーキの箱持って、私たちがオッサンのところに行くのを、もしもまた誰かに見られたら、学校でみんなに何言われるかわかんないでしょ」

「へえ、マコもそういうの気にしたり空気読んだりするんだね。それってマコらしくないけどね。でもバレルのはぜーったいにいやだから、遠回り案に賛成、そうしよう」

ユウの「マコらしくない」という言葉が胸にチクリとささった。私はオッサンと仲良くすることを恥はずかしいだなんて絶対に思っていない。マコは心の中でそうつぶやく。

ママは私をユニークな子だって言ってたけど、私だって本当は自分が仲間はずれにされるのが怖いんだ。マコはあれから、なるべくみんなのペースに合わせて、目立たないように学校生活を送ろうと心がけていた。

仲間はずれにならないことは、小学校生活においてとても重要だとマコは気がついてしまったのだ。

二人の意見が一致いちじしたので、自転車にまたがると、マコとユウは土手に向かういつもの道とは反対方向にペダルをこぎ出した。葡萄ぶどうの門をあけると、オッサンは薄汚れたランニングと破れた

ベージュの作業ズボンといういつもの格好で庭のコブシの木の下にいた。大きな丸太をノミで削削っている。四つ足動物の木彫りの彫刻を作るつもりであろうことが、木に木炭で描かれた下書きからわかった。

マコとユウに気がついたオッサンは、作業の手を止めて「母家おともやの二階」を指さした。

「ずいぶん今日はゆっくり来たな。さては寄り道でもしてたな？ 上に今日の課題が準備してあるから、こっち片づけてから説明に行くから上がってちよつと待ってろ」

マコは手に持った箱に目をやった。遠回りしたことはオッサンには言えない。まして、オッサンと仲良くしたら学校で仲間はずれにされるなんて言えっこない。マコはオッサンを傷つけたくなかった。だからいつもよりも、もつと明るい声で大げさな身ぶりをつけながら、¹⁶できるだけ子どもらしく無邪気むじやきそうにケーキの箱をオッサンの前に差し出した。

「はい。オッサン先生！ 今日父の日だから、オッサン先生の父の日パーティのために、ママが朝、マーレードケーキを焼いてくれたの。私もお手伝いしたんだよ。二階に上がると階段でせっかくのケーキがぐちゃぐちゃになるかもしれないから、母家の一階のテーブルに置いておきますね」

「へえ、あつそ、父の日ね。ふん。ケーキなんて俺、よく食べないぜ」

オッサンは気に留とめた様子もなく、いつもどおり、ふてぶてしくそう言った。まあ、そう言うだろうなと予測していた反応だったので、マコもユウもそれには返事をせず、ケーキを持って母家に向かった。《中略》

二人は、ケーキを母屋に置くと、絵画教室が行われる小屋の二階に行き、絵の具の準備をしながらオッサンを待っている。

絵を描くためだけに存在するこの小屋で絵の具の具のおいをかぐと、どんな時でも心が落ち着いた。不安なことや怖いことを忘れて、白い紙にこれから生まれるであろう鮮やかな世界にすんなり集中することができた。マコは今日もここに来てよかったと思っただ。そんなことを考えていると、ユウがイライラした調子で話し出す。

「それにしてもオッサン、ケーキあげても、ちっともうれしそうじゃなかったね。マコのママが早起きして作ってくれたのにさ。私たちだつてせっかく遠回りまでして苦労して持ってきたのに。ほんと失礼なヤツ！ 大人なのにおかしいよね」

マコはなんとなく曖昧に笑って「そしたら二人でケーキの山分けだ」とわざとおどけてみせたけれど、マコは自分が大きなウソをつけている気持ちになった。何も知らないオッサンはいつもと変わらなかった。変わったのは自分なのだ。

ギシギシと階段を上がる音がした。小さなドアが開くと、姿勢を低くしながらオッサンが教室に入ってきた。

「えっ!? オッサン先生、どうしたの!？」

マコはオッサンを見て思わず声に出した。ユウもびつくりしている。

「ん? なんか変か?」

18 オッサンは折り目のついた真新しいシャツに着替えてやってきた。それがなぜか変なのだ。

襟のついた胸元に小さなワニのマークの入った白いシャツは街で見かけるおじさんたちがよく着ている服だし、その服がおかしいわけでは決していないはずだ。下ろしたてのブランド物の真っ白のシャツを着たオッサン先生。

ススだらけの顔だけが浮いて、とにかくそのシャツはぜんぜん似合っていないかった。さっきの茶色いシミのついた小汚いランニングのほうが断然似合う。シンプルな白シャツがこんなに似合わ

ない人がこの世の中にいたなんて、とマコは思う。父の日のパーティと聞いてダンスの中にしまってあった新品のシャツに着替えてきたのだ。

そう思ったらさつきまでの罪悪感にも似た気持ちはどこかへ行ってしまったかのように、なんだかとてもおかしくなって笑わずにはいられなかった。マコがケタケタと笑うとユウもつられて笑い出した。オッサンは楽しそうに笑う二人を不思議そうにしばらく見ていた。それからニコリともせずに、

「美術教室はお休み。今日はパーティだ」と宣言した。

母家のちゃぶ台の上のケーキの前に、緑茶をすすりながらマコはオッサンに質問する。どうしても聞いてみたかったのだ。マコは一度知りたいと思うと、相手かまわずなんでも質問してしまうところがある。マコのこの特性もみんなの中で浮いてしまう一つの理由なのかもしれない。それでもマコは疑問があると口に出さずにいられないのだ。

「ねえ、オッサン先生は、近所の人から『変わり者』って言われてるでしょう。それでいつも一人でいるでしょう。寂しかったりいやな気持ちになることはないの? お友だちはほしくないの?」

19 困惑した顔でマコを見ている。オッサンはひょうひょうとした様子でマコのほうに半身を向けた。それから頭をボリボリかいた。

「ん? 失礼なこと言うなよ。俺にだって友だちくらいいるよ。みんなと仲良し? そんなのはナンセンス(＝無意味であること)。くだらないね。俺は友だちは作ろうと思ってるもんじやないと思ってる。無理して媚びたり気を遣ってできた友だちなんてどうせロクなもんじやないぜ。俺はひたすら彫刻を作ったり絵を描いたりしていたら、そこに人が集まってきた。自分の好きなことに

夢中になってたら、気がつかないうちに友だちができていたんだ。俺の友だちは外国で自分の道でがんばってるんだ。別にしよつちゆう会う必要もない」

オッサンはケーキを一口ほおぼって、話を続けた。

「それから近所の連中が俺をなんて言ってるか知らないが、『変わり者』だって？ えへへ、そんなふうに言われてるなら上等だぜ。みんな自由に生きてる俺にやきもち焼いてんのさ。自由は人から与えてもらうもんじゃない。勝ち取るものだ。俺の幸せとヤツらが幸せと感ずることが違うんだ。まわりがどう言おうといちいち傷ついてる暇なんてないよ。時間がもつたない。俺は彫刻を作っっていられたらそれで満足さ」

オッサンが本気で言っているのか、はたまた強がって言っているのかはマコには見当がつかなかったけれど、²⁰ 今だけしか聞くことのできないとても特別な話に感じた。それから友だちってなんだろう？ 自由ってなんだろう？ と思った。

どちらにしても確かなことはオッサンはみんなから仲間はずれにされても、彫刻を作っってさえいられば生きていけるのだ。それはすごいことだし、なんだかとてもうらやましく思えた。だからオッサンの作る作品は美しいのだ。

その日のオッサンは終始上機嫌だった。小さな古いちゃぶ台を囲んだ親子でもないマコとユウとオッサンは、父の日のパーティーと称して、マーマレードケーキを切り分けもせずそのままフオークでつつきあつて、あつという間に平らげた。ケーキは好きじゃないと言っただけのオッサンも、口にクリームをつけたまま「このケーキなら、俺、食べられるな」とまた一口、ほおぼつた。

(蟹江 杏『あの空の色がほしい』河出書房新社より)

問 1

— a ~ c の本文における意味として、最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「華奢きゃしゃな」

- ア 身長が低く迫力はくりよくがない
- イ ひどく落ち着きがない
- ウ ほっそりして弱々しい
- エ 病気がちで頼りたよりない

b 「ひょうきんで」

- ア 気さくでおもしろおかしい
- イ うっかりもので軽薄けいはくな
- ウ 周りのことを気にしない
- エ 誠実でまっすぐな

c 「ふてぶてしく」

- ア 冷たく
- イ ずうずうしく
- ウ 大げさに
- エ さりげなく

問 2

【A ~ D に次の言葉をあてはめ、記号で答えなさい。
(同じ記号は一度しか使えません。)

- ア ふらふら
- イ バンバン
- ウ メソメソ
- エ グルグル

問3

——1「修はその目線には気づかないのか、トーンをあげて話し続けた」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 相手を見ると言いたいことが言えなくなるので、一気にまくし立てて圧倒しようとしているから。

イ 自分の主張に反論されないうために、強い調子で言うことで周りを味方につけようとしているから。

ウ 大人の言っていることを信じて、あたかも自分で考えた意見のように見せようとしているから。

エ 自分が言っていることが正しいと思ひ込み、その正当性を主張することに夢中になっているから。

問4

——2「それから先のことはあまり覚えていない」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア オッサンや自分たちのことを修が一方的に批判してきたので、怒りのあまり我を忘れてしまったから。

イ 自分が今まで秘密にしてきたことを修にばらされて、ひどく腹が立ったから。

ウ 以前から信頼していた修に、思いがけず悪口を言われたので、深く傷ついてしまったから。

エ オッサンが非難されるのは仕方がないが、親友のユウを悪く言う修に我慢ができず、気が動転していたから。

問5

——3「下唇を噛みしめて一点をにらみつけていた」とありますが、この様子からユウはどのような人物だとわかりますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の感情や気分には振り回されず、いつでも冷静に物事に対処しようとする人物。

イ 立場が強いものには逆らわず、自分から友好的な関係を築こうと心がけている人物。

ウ みんなの前では、自分の感情をできるだけ表に出さないようにしている人物。

エ 自分のできることを常に考えて、周囲の人たちへの配慮を忘れないおだやかな人物。

問6

——4「マコは少なからずショックを受けた」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア ママから言われる前に謝ろうとしたのに、厳しく問いつめられたから。

イ 頼りにしていたママも自分の無実を信じてくれず、悲しい気持ちになったから。

ウ ママが自分の言い分も聞かずに、修に無理矢理謝らせようとしたから。

エ ママに伝えたいことはたくさんあったが、緊張して普段のように話せなかったから。

問7

——5「修の母親はほんの少し口角をあげて首を伸ばして、ママを上から見下ろした」とありますが、この行動から修の母親のどのような考えを読み取ることができますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア まともに子育てをしているとは思えないマコの母親に、この際はつきり言っておこう。

イ やはり自分たちが正しかったので、改めて親としての責任を取るよう追及しよう。

ウ オッサンの悪い影響を受けて、自分の子どもがオッサンのような大人になったら困る。

エ マコの家の教育方針が間違っていることを、先生たちにも早く理解してほしい。

問8

——6「ママは長いまばたきを一回した」、——7「もう一度深呼吸をした」とありますが、この時のマコの母親の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 修の母親の言うことはおかしいと思いつつも、何も言い返せない自分のことを恥じている。

イ 修の母親の言うことが理解できずに、頭の中で整理しようとしているが、ひどく混乱している。

ウ 修の母親の言うことはもっともだと思いつつも、自分の家のことまで気遣ってくれたことに感謝している。

エ 修の母親の言うことに反論したい気持ちをこらえ、言い争いにならないように、心を落ち着かせている。

問9

8で、マコは何と言おうとしていたのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア もう争いはやめて

イ 私はもう謝ったのに

ウ どのなるなら私だけにしてくれ

エ 修のせいどころなつたのだ

問10

——9「清水先生があわてて話し出した」とありますが、この時の清水先生の考えとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 修の母親がなかなか引き下がろうとしないので、他の教員も交えて対策を練り直し、もう一度来校してもらおうと考えている。

イ 今は何を言っても修の母親が納得するとは思えないので、余計なことを話さずに何とかこの場を丸く収めようと考えている。

ウ これ以上話を続けると、マコの母親も小野先生を責め始めるのではないかと心配して、早く話を終わらせようと考えている。

エ 修の母親が小野先生ばかりに責任があるように話を進めるので、先輩の教師である自分が矢面に立とうと考えている。

問 11

「机の上に置かれた修の手に自分の手をそつと重ねた」とありますが、この時の小野先生の気持ちとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 修の気持ちに寄り添いつつも、今回の件の原因について修にも考えてほしいと思っている。

イ 修の母親の迫力に圧倒されながらも、修に間違いをなんとしても認めさせようとしている。

ウ マコの行動によって落ち込んでいる修に、自分も味方だとわかってもらおうとしている。

エ 今回の件で修が調子に乗り、マコにつらく当たるとも思えない状況を防ぎたいと思っている。

問 12

「11 学校から家までの道」から、「14 ミドリ公園の角を曲がる頃」までのマコとママの会話から、二人のどのような関係を読み取ることが出来ますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 教育方針に基づき正しい方向に導こうとする親に、子どもが従わざるを得ない関係。

イ 互いを励ましあいながら、どんな困難にも立ち向かおうとするライバルのような関係。

ウ いつも仲が良く、互いが傷つくことがあっても何でも我慢せずに言い合える親友のような関係。

エ 気持ちを聞き、じっくり会話を重ねながら一緒に方向性を考えていく、信頼し合う関係。

問 13

「12 暴力ではなくて別の方法」とありますが、ママはどのような「方法」を提案していますか。二十字以上三十字以内で答えなさい。

問 14

「13 マコは変な子じゃなくてユニークな子だとママは思うよ」とありますが、ママは「変な子」と「ユニークな子」の違いをどのようにとらえているのですか。それを説明した次の文章の1く3にあてはまる語句として、それぞれ最も適当なものを1・2は【選択肢A】から、3は【選択肢B】から選び、記号で答えなさい。

「変な子」は1 ととらえるのに対し、「ユニークな子」は2 ととらえている。だからマコの特徴を

3 と考えている。

【選択肢A】

ア 目立ちたがり屋の子

イ 生活態度の悪い子

ウ 自分だけの個性がある子

エ 周りに合わせて空気を読む子

オ 集団の結束を高める子

カ 異質なものとして排除される子

【選択肢B】

ア 改善していこう

イ みんなに広めていこう

ウ 繰り返し伝えていこう

エ 長所として活かしていこう

問15 — 15 「もやがかったように不安な気持ち」とはどのような気持ちですか。五十五字以上六十五字以内で答えなさい。

問18 — 18 「オッサンは折り目のついた真新しいシャツに着替えてやってきた」とありますが、この行動からはオッサンのどのような気持ちがわかりますか。二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問16 — 16 「できるだけ子どもらしく無邪気そうにケーキの箱をオッサンの前に差し出した」とありますが、マコがこのような行動をとったのはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

問19 — 19 「困惑した顔でマコを見ている」のはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 父の日パーティに関係ない話を持ち込んで、場の雰囲気

ア 前からオッサンに聞きたかったことをマコが質問したから。マコが突然その場に合わない質問をオッサンにしたから。

イ オッサンにケーキを持ってきたと素直に伝えるのは、なんとなく気恥ずかしくなかったから。

ウ マコがオッサンに余計な質問をしてケーキが食べられなくなったから。

ウ 学校での出来事をオッサンに気づかれないように、いつも以上に楽しそうにふるまおうとしたから。

エ オッサンが普段から気にしていることをマコが質問し始めたから。

エ 自分のことを大切に思ってくれているオッサンに、これ以上心配をかけたくなかったから。

問17 — 17 「変わったのは自分なのだ」とありますが、マコはどのように変わったのですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分だけの秘密を隠し通すために、周囲の人たちにウソばかりつくようになった。

ア 友だちの数が多いに越したことはないが、本当に心を通わすことができる人数は限られているので、数にこだわる必要はない。

イ 自分だけが悪目立ちしないように、周りの雰囲気にしたがつて生活するようになった。

イ 自分の気持ちをおさえてまで相手に気に入られようとする必要はなく、自分の行きたい道を突き進んでいけばよい。

ウ 相手が自分に失礼な態度をとっても、すぐに腹を立てず我慢できるようになった。

ウ 心がつながっている友だちとは頻繁に会う必要もないので、そのような友だちを子どものうちから作っておくことが大切だ。

エ 自分に自信が持たず、尊敬するオッサンにまで本当の思いを打ち明けられなくなった。

エ 自由に人生を送るためには、他の人と勝負をして多くの経験を積み、自分の強みを見つけて努力を続けていくべきだ。

問 21

この作品を読んだ生徒が感想を話しています。本文の内容に合うものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア マコの視点から先生やママなど大人たちが思っていることを繰り返すことで、大人たちは皆同じ考えに基づいて行動していることが示されているね。

イ マコとオッサンの会話の間に、時折ユウの視点で見たオッサンへの思いが挟まれることで、マコの幼さやわがまを強調し、客観的に見たマコの姿が描かれているよ。

ウ 修のペンケースの形が大きく変わってしまったことは、修がマコにした行いを取り返しのつかないものだったことを暗示しているね。

エ 絵の具のにおいをかいただけで絵の世界に入り込んでいくマコの様子からは、マコの芸術に対する感性の豊かさが読み取れるよ。

問題は以上です。